

思いでの先生方 中澤 節子 先生 (79才)

母・中澤節子

長女 後藤 淳子 (36回生)



母は大正8年11月1日、東京で3人兄弟の長女として生まれました。この拙い文が皆様のお目に留まる頃には、80歳になつてはいます。でも私が書いている現時点では、まだ79歳です(ここの所がともつるさい。クレームが付かないよう正確な期さねば)。5歳の時、あの関東大震災に遭い、親子5人命からがら東京を逃げ出して、関西に移り住みました。兵庫県立第一神戸高女・高等科・英文科を卒業後、昭和16年の秋に父と結婚。翌17年に私、18年に妹とあつと言つ間にふたりの子持ちになつてしまいました。



昭和17年 母23才 淳子0才

19年の春に父に召集令状が来

て出征、20年の終戦の日を目前にした7月17日に戦死、とふたりの結婚生活は正味2年と少し位でしょうか。猛スピードであつてはなかつたもののひとり身、25歳でした。しかもふたつのコフ迄付いて…。もともと母には英語の教師にならつたという気持ちなど皆無だつたのだ。そうです。時代が時代だつたもので、それから、女が外で働くなんて、普通の家庭の娘がする事ではなく、お茶・お華・料理…とお定りのいわゆる「嫁入り修業」なるものをしつかりやらされたとか。ただ英語が人一倍好きで、チヨツ

ト頑張つてみただけとの事です。「好きこそもの上手なれ」「芸は身を助く」というのが、実感を含めた母の口ぐせです。夫に死なれ、ふたりの子供と母親を抱えて、さてこれからどうやって生きて行くか？ 愚案投げ首の竹の子生活を、



昭和41年 45回生と遠足で室戸へ

見るに見かねた知人が仕事の世話をしつてあげようと、母の履歴書を見て、「おまさん！ この経歴じゃと先生の資格がありあせんかね？」と言つて下さつたらしいのです。自分に資格がある事さえ知らないという有様だつたようです。そして疎開していた父親の出身地である香美郡夜須町の中学校に、無事職を得る事が出来ました。その2年半後、ある方のご紹介で面接を受けた土佐高に、幸運にも採用されたのでした。以来、時間講師としての最後の一年を含めての48年間、ずっとお世話になつたという次第です。夜須中学の分を加えますと50年と半年。教師生活半世紀というわけです。(ただ今、明徳義塾校にて記録更新中)

数多くの出会いや別れがあつたであろう48年間の母の土佐高生活のうち、私がすぐそばで、教師としての母を見ていたのは16年間だけです。ちょうど3分の1というわけで、



昭和47年 土佐高校庭で

私の思い出の中にある「母と土佐高」という事では、やはり32回生の方々を置いては語れないと思います。と言つより、その他の学年の方々との交流を、私がいまだ知らないと言つた方が正しいのかも知れません。昭和26年、母が土佐高に就職出来たその年、時を同じくして入学されたのが32回生。つまり両者は「同期の桜」というわけなのです。その頃、私達女ばかりの4人家族は、学校近くの小さな古い借家にひっそりと暮らしていました。飼つていた犬で「チロ」という名のメス犬でした。その女の園(?)と

も言つべきあばら屋に、毎日毎日、入れかわりたちかわり誰も来ない日は無い位、常に誰かが来ていたように記憶しています。圧倒的に男子生徒で女生徒は4、5人。それもさつぱりとした威勢のいい、

およそ「女」を感じさせない(失礼!)方々ばかりでした。それが6年間続きました。さすが大学生ともなると、ほとんどの方が県外に行かれたものですから、随分間遠にはなりました。それでも帰省の度にお顔を出して、母を喜ばせて下さいました。それは社会人となられた後もずっと続き、大半の方が老眼・白髪頭になってしまわれた今に至っております。

年令的にはうって付けの4歳年上の男性が、あんなにたくさん出入りしていたのに、なぜか我が身にロマン스는ひとつとして芽生えませんでした。最近になって、やっとその理由が分かりました。昨年の夏、母が上京した折に「淳ちゃんも一緒に」と食事に招



いて頂いた時の事。Y君いわく、「あの頃、おれらあ野郎の目は全部、年若い美しき未亡人の方ばかりかし向いちよつたがよ。」「えー!ほんなら私と妹はあしやま申あつたか?」「あつたりまえよ、ガキは目

じゃなかつたわえ」です。(この会話は、実のところもつと「人間味あふれる」と申しましょつか、いや、いささか「生臭い」とでも言った方が...。同窓会の会報には、あまりふさわしくない表現だったものですから、少々脚色してあります。)

平成9年 病氣手術後自宅にて51回生と

この春、やっと土佐高から完全撤退。すんなり「ご隠居さん」に納まるかと思いきや、母の教師としての情熱はまだまだ失われてはいない、もつたいたいではないかと惜しんで下さる方々のご尽力で、明德義塾校に現場復帰致しました。

「今迄ガムシヤラに働いて来たんだから、あと残り少ない(?)人生、楽しく遊んで暮らしてもハチは当たらないよ。」と申しますと、「遊びは飽きるけど、仕事に飽きは来ない」「私は教える事が好き」「根っからの英語教師」「教師は天職」「生涯現役」...まあまあ好きなようにして下さい。

80歳になんなんとする今、上にはごつに還暦を過ぎた方々から、下は自分の孫よりも若い方達迄から、「先生」「先生」と言つて頂くのを見るにつけ、「教師冥利につきる」とはまさにこの事と、心の底からそう思います。私も何とかが「普通のおおはあさん」にさせようと、やっきになった時期もありましたが、ここ迄来たらもつ応援するしかないのと、覚悟を決めました。あと何年続ける事が出来るか分かりませんが...